



令和6(2024)年度 堺アーツカウンシル 活動報告書
令和7(2025)年12月発行

<発行> 堺アーツカウンシル（堺市文化課）
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3-1
TEL 072(228)7143
FAX 072(228)8174
MAIL bunka@city.sakai.lg.jp

<デザイン> 株式会社松岡印刷所



堺アーツカウンシル公式SNS



令和6(2024)年度 堺アーツカウンシル 活動報告書



はじめにープログラム・ディレクターからのごあいさつー	3
堺市の文化芸術関係図	4
堺アーツカウンシルについて	6

堺アーツカウンシル令和6(2024)年度活動総括	8
--------------------------	---

堺市文化芸術活動応援補助金について	9
令和6(2024)年度採択事業紹介	10

文化芸術活動に関する相談・対話	18
地域連携レポート	19
モデル事業	20
勉強会	22
広報	23
交流会	24

座談会ー令和6(2024)年度の活動を振り返ってー	25
---------------------------	----

はじめにープログラム・ディレクターからのごあいさつー



撮影：のり やまもと

堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター

上田 假奈代

毎年、夏はますます暑くなっているように感じ、地球温暖化を実感し、世界では戦争が続いています。「つながり」という言葉をよく聞けれど、日本の若者の自殺率は上がり、こどもの貧困率は悪化し、厳しい状況の高齢者が増え、ますます格差が広がっています。そして、AIがめざましく発達し生活に浸透してきました。

堺市では文化芸術活動が地域に根づき、こども食堂や地域活動に創造的な視点や新しい参加者が増えること、コミュニティのつなぎ役を担う役割を持つことも期待しています。

福祉や医療、教育などのケアの現場にもアートが入ることで、支援・非支援の関係を越えて、想像もしていなかったことが起きたり、ユニークな展開になることもあります。ゆるやかなつながりはお互いを気にかけて、孤立を防ぎ、災害時などのもしもの時に役立ちます。医薬品だけで治療するのではなく、人とのつながりのなかでともに生きる「社会的処方」は、アートの可能性に通じるものです。

そのためには地域のなかで日常のなかでつながりの生まれる機会や時間を重ねることが必要でしょう。

文化芸術はその効果をわかりやすく数字で表すのはとても難しいものです。入場者数を数えることは簡単ですが、例えば多ければよいわけではありません。今年度は「芸術活動の評価とは査定ではなく価値づけを行うこと」と学びました。そのためにも市民のみなさん、文化芸術の担い手のみなさんとともに、対話や経験を重ねることが大事だと考えます。文化芸術活動の雑多なプロセスを丁寧に取り組んでいると、目的や目標に想定していないことが生まれるのも文化芸術の特徴です。そうした不確実な可能性を含むほど、文化芸術の領域は広がっています。

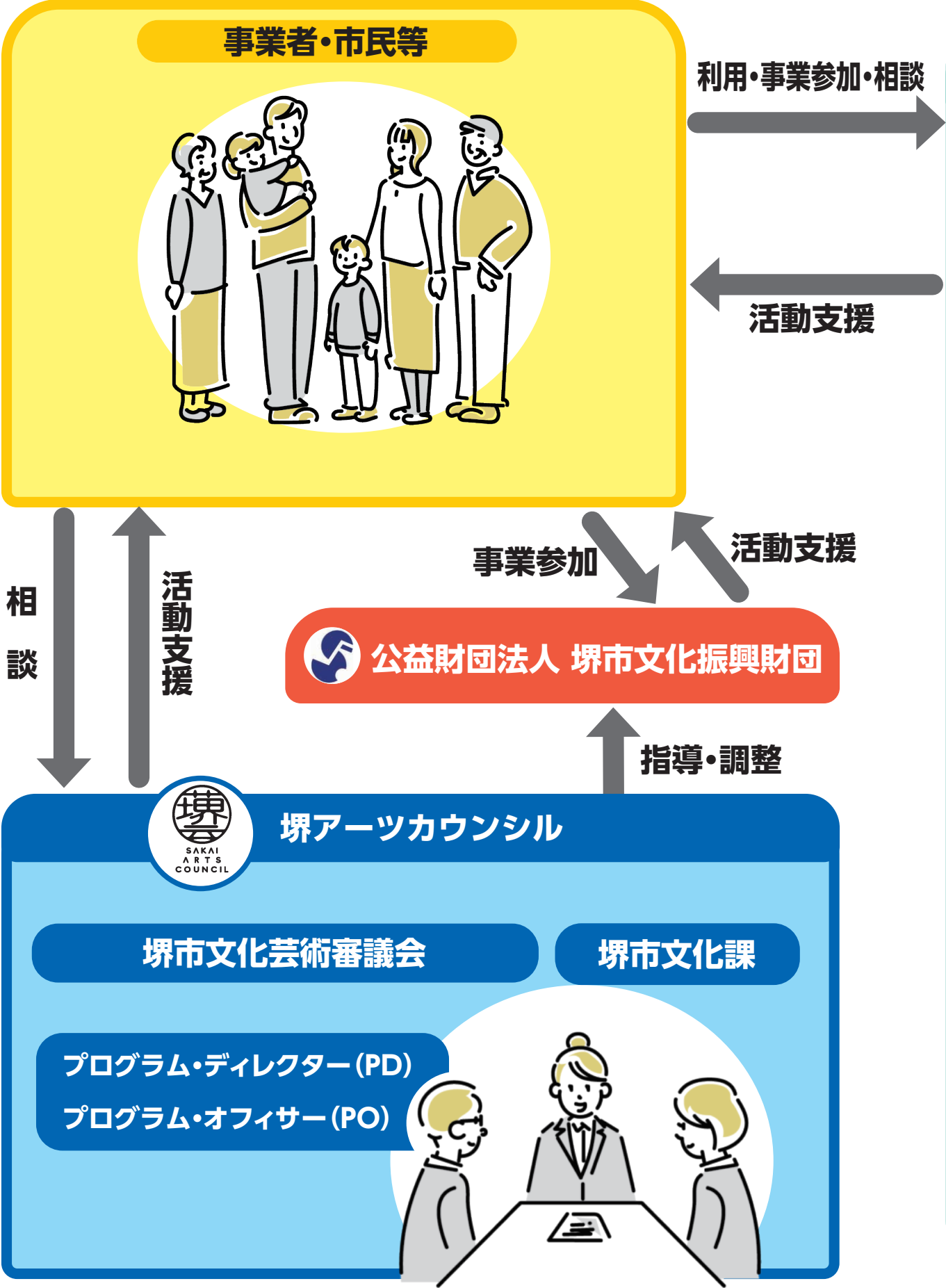
社会福祉協議会から地域活動についての相談を受けた堺アーツカウンシルが地域の会議に出席しているうちに、冬には小学校で地域のみなさんと餅つきや焚き火をしていました。また、関西大学の福祉を学ぶゼミから出所者がつくった作品のアート展を開催したいという相談から、展示のためにアーティストを紹介し展覧会まで伴走し、関わった人たちがそれぞれに揺さぶられる場が生まれました。想像もできなかったことが起こり、ひとりひとりの未来が変化していくことは、AIには予想できないことかもしれません。

上記はほんの一例で、堺市では市民のみなさんがさまざまな文化芸術活動に取り組んでいます。そこにはコミュニティが息づき、ゆるやかなつながりが生まれています。

堺市で文化芸術が生まれ育つ場がもっと耕されるよう、堺アーツカウンシルは活動していきます。

いつか未来の堺市の人たちが、堺市に文化芸術があってよかった、先人たちが文化芸術を、アートをあきらめないでよかった、と思えるようにバトンを渡していきたいと思います。

令和7(2025)年 冬



堺アーツカウンシルについて

堺アーツカウンシルとは

専門知識を有する人材が、文化芸術に携わる人たちを支援することで文化芸術の振興を図り、文化芸術を活用して子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化といった様々な分野の社会的課題の解決をめざす組織で、令和3(2021)年1月に設立しました。

文化芸術に関する専門知識を有するプログラム・ディレクター（PD）とプログラム・オフィサー（PO）を中心として、堺市文化芸術審議会、堺市文化課で構成しています。

主な活動内容



プログラム・ディレクター (PD)



上田 假奈代

詩人・詩業家

専門分野：ことば、存在の表現

1969年奈良県吉野生まれ。「ことばを人生の味方に」、2003年大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココルーム」を立ち上げ、2008年西成・釜ヶ崎に移動。2012年まちを大学に見立てた「釜ヶ崎芸術大学」、2016年ゲストハウス開業。大阪公立大学都市科学・防災研究センター客員研究員。大手前大学国際看護学部非常勤講師。2014年度文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞。著書「釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店 ココルーム」フィルムアート社



梅山 晃佑

専門分野：教育、場づくり、キャリアデザイン、市民活動

※令和7(2025)年3月から就任

大阪教育大学卒業後、市民活動やNPOの中間支援事業に20年近く携わり、アート、福祉、まちづくりなど幅広い分野でのサポートを経験。専門は、プロジェクトや団体の立上げや運営に必要な知識・スキルを学ぶプログラムの企画。また自身も地域でアートプロジェクトの企画やコミュニティスペースの運営を行うなど、プレイヤーの視点・経験も持つ。最近では端材廃材活用プロジェクトや島根の出雲でのコミュニティスペースづくりなども行っている。京都芸術大学アートプロデュース学科非常勤講師。



川那辺 香乃

専門分野：アートプロジェクト、ファシリテーション、身体表現

教育現場におけるアートワークショップのコーディネート、地域コミュニティでのアートプロジェクトのディレクション、社会課題をテーマにしたワークショップのプログラム開発、障がい者の文化芸術活動の支援などを行う。最近ではアートプロジェクトの調査研究にも取り組んでいる。NPO法人子どもとアーティストの出会いプログラムディレクター。NPO法人アートNPOリンク理事。



古谷 晃一郎

専門分野：アートマネジメント、文化芸術相談員

※令和7(2025)年3月から就任

堺市生まれ。公立文化施設、文化財団職員を経て、フリーのアートコーディネーターに。舞台制作や設営、舞台監督、展覧会の制作など、アート活動の現場や中間支援に携わってきた。大阪府立江之子島文化芸術創造センター プログラムディレクターをつとめ、大阪市アーティストサポート窓口「なにそうだん」相談員などで、大阪のアート活動よろず相談役。NPO法人Be Creative理事。

プログラム・オフィサー (PO)



青木 敦子

専門分野：子どもとアート

2003年～08年大阪市、08年～16年高槻市の文化振興事業を行う現場でアートマネージャーとして働く。大阪市の現場で出会った仲間とNPOrecip（特定非営利活動法人地域文化に関する情報とプロジェクト）を2004年に設立。2016年からフリーランスでこどもの育ちを〈アート/表現〉でサポートする活動に注力している。



大澤 寅雄

専門分野：文化政策、アートマネジメント

※令和7(2025)年3月まで就任

1970年滋賀県生まれ。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。地域文化を生態系として観察する「文化生態観察」を実践中。合同会社文化コモンズ研究所代表、NPO法人アートNPOリンク理事長。



中脇 健児

専門分野：コミュニティデザイン、ワークショップ、ソーシャリー・エンゲイジド・アート

“その場にいる人とその場だからできるコトを考える”「場とコトLAB」を立ち上げる。伊丹市文化振興財団に14年間所属。「遊び心」をキーワードに、アート、コミュニティプログラム、地場産業支援、教育、福祉など活動は多岐に。近年はファシリテーションやワークショップの専門家育成も。共著に『タウンマネージャー』『地域×クリエイティブ×仕事～淡路島発ローカルをデザインする～』（ともに学芸出版）。NPO法人こととふラボ理事。大阪芸術大学芸術計画学科准教授。



宮地 泰史

クラシック音楽を中心としたマネジメント、アートマネジメント全般

河内長野市文化振興財団、八王子市学園都市文化ふれあい財団にて舞台の企画・制作を担当。演劇、オペラ、ミュージカルなど、様々な舞台作品に携わってきた。現在は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールで室内楽を中心としたコンサートの企画・制作を担当。他に個人的な活動として謎解きとクラシック音楽を掛け合わせた舞台「音楽探偵パッハの事件録」を企画し各地で展開中。大阪芸術大学芸術計画学科客員教授。

堺アーツカウンシル令和6(2024)年度活動総括

令和6(2024)年度は、プログラム・ディレクター（PD）1名、プログラム・オフィサー（PO）7名の体制で、下記のとおり、堺市における文化芸術活動の相談、視察を通じた支援活動や、調査研究、情報発信を行った。

①相談

令和6(2024)年度の文化芸術活動に関する延べ相談件数は62件。堺アーツカウンシル（以下、堺AC）が事業を開始した令和3(2021)年度が42件、令和4(2022)年度は56件、令和5(2023)年度は87件とこれまで順調に増加していたが、今年度は減少した。しかし当年度の初回の相談が24件（38.7%）、再来が35件（56.5%）と再来の割合が多く伴走支援につながったり、社会福祉協議会や大学の相談から新規事業が立ち上がるケースも生まれている。

62件のうち市内の活動の相談が57件（全体の91.9%）で、相談が多かった時期は補助金申請が締め切られる12月に集中した。当年度の補助金対象外の活動の相談が34件（全体の54.8%）だが、相談内容の分野としては、次年度の補助金の申請の準備に関する相談が多かった。補助金関連以外での相談を増やすことが今後の課題である。

過去4年間での相談は累計247件で、その79.4%の相談内容が補助金に関する事業内容である。初年度は申請書の書き方の相談が多かったが、近年は企画内容の相談が増え、こどもや障害者が参加しやすい場づくりについてなど専門性が求められる。

②視察

当年度の文化芸術活動に関する延べ視察件数は37件で、令和5(2023)年度の26件から増加した。視察の初回の訪問は23件、再訪が14件となっている。37件のうち市内の視察が36件で、当年度の補助金に採択された活動の視察が31件となっている。すべて公演や展覧会などの本番の視察で、本番前後にヒアリングも行った。

過去4年間での視察は累計154件。初年度の令和3(2021)年度では初回の視察が65.9%、再訪の視察が34.1%だったのが、令和5(2023)年度には初回38.5%、再訪61.5%とバランスが反転していた。しかし、当年度は初回62.2%、再訪37.8%と戻り、積極的に堺市内の文化芸術活動の現状把握を行った。また、視察の際にアーティストの選出方法やプログラムの組み立てなどの相談も多く見受けられた。

③調査研究

当年度の補助金対象活動の来場者・参加者に対するアンケート調査では2,178件(前年度2,009件、前年度比8.4%増)の回答があった。来場者・参加者の総合的な満足度で満足層は96.9%、堺ACの目的について肯定的な期待を寄せた回答が86.5%となっている。調査の結果から、当年度は以下の2点に着目した。

1. 来場者・参加者の年代で、60代以上は49.9%（前年度56.1%）と高齢者の割合が初めて半数を割った。さらに19歳以下、20代の回答が10.5%（前年度7.2%）、4.2%（前年度3.3%）と前年度よりも増え、徐々にではあるが世代間の偏りが緩和されつつある。しかし、引き続きあらゆる世代が文化芸術に触れられるよう、広報や集客の工夫が必要である。

2. 来場者・参加者の在住地が、「南区」20.5%（前年度21.9%）、「堺区」15.0%（前年度13.7%）と前年度に比べ減り、「美原区」1.6%（前年度0.3%）と増加した。全体の構成比を見た時、これまでは南区、堺区に偏りがあったが、今回はその偏りが大きく現れていない。今後も堺市内で文化芸術の活動の場や市民の参加機会に地域による不均衡が生じていないか、注視していきたい。

④情報発信

地域で文化芸術活動をされている方のための勉強会を3回、交流会を4回実施し、延べ参加者数は79人となっている。また、ニュースレターを4回発行した。

堺ACが本格的に活動を始めてから4年目となる令和6(2024)年度も、相談・視察、調査研究、情報発信という活動を通じて、文化芸術に携わる人たちを支援、文化芸術の振興、文化芸術を活用した社会的課題の解決をめざす取り組みを継続した。当年度及び過去4年間で明らかとなった事業の結果（アウトプット）と成果（アウトカム）を以下のように挙げるができる。

- 対前年度比で、相談件数は28.7%の減少、視察件数は42.3%の増加となった。相談件数は減少したものの、新規事業が生まれており、地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向、かつ継続的なコミュニケーションが活発化している。
- 引き続き堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談を積極的に受け入れた。4年前には補助金の制度や記載方法といった形式に関する相談が多かったのが、来場者や参加者の視点に立った企画内容に関する相談など、今まで以上にPD、POの専門性と経験が求められるケースは増えている。
- 相談の再来や視察の再訪により、コミュニケーションの双方向性が強まり、「相談」と「視察」の区別を越えた「伴走支援」に発展しているケースもある。
- アンケート調査では、4年間で調査対象数が着実に増加し、前年度と同水準で補助金対象活動の来場者・参加者の高い満足度と、堺ACに対する肯定的な期待を確認した。また、参加者の年代と在住地において、偏りが緩和されつつある。
- 勉強会や交流会では、地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向の交流の機会を創出した。

上記の成果は、令和3(2021)年2月に策定された「第2期堺文化芸術推進計画」の重点的施策1-1「文化芸術を通じた社会的課題の解決」、1-2「すべての人が文化芸術を享受できる機会の充実」、1-3「市民の文化芸術活動の機会の提供」に沿った活動の結果であり、堺ACの活動は重点的方向性1「文化芸術とともに生きる」への寄与が認められる。

次年度以降も引き続き実績の推移や変化を測定し、成果や波及効果を把握しながら、堺市の文化芸術振興を着実に進めていきたい。

堺市文化芸術活動応援補助金について

堺市文化芸術活動応援補助金とは

歴史ある堺の文化の良さを継承し、市民の文化活動の振興を図り、地域文化の創造に努め、また、文化芸術の力を活用して、子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化等の幅広い分野における社会的課題の解決に資する事業の実施に要する経費を市が補助することにより、自由で心豊かな市民生活の実現及び都市魅力の創造に寄与することを目的として令和3(2021)年に創設した補助金です。

より効果的な事業実施をめざして、堺アーツカウンシルが申請時の事業の組み立てについての相談受付や視察、事業実施の際の伴走支援を行っています。

次頁以降で、堺アーツカウンシルが実際に視察した令和6(2024)年度採択事業の一部をご紹介します。

補助金の区分

	一般補助		特別補助	
区 分	スタートアップ支援事業	地域文化活動 ステップアップ支援事業	市民文化活動推進事業	都市魅力創造事業
対象活動内容	地域で新規または内容を 拡充して行う小規模な 文化芸術活動	地域における 文化芸術活動	すべての市民が身近に 文化芸術に触れる機会を 提供する事業	文化芸術の力を活用して 都市魅力を創出する事業
補 助 上 限 額	10万円	50万円	100万円	300万円
補 助 率	補助対象経費の1/2以内			

令和6(2024)年度申請・採択件数

	一般補助		特別補助		合計
申請区分	スタートアップ 支 援 事 業	地域文化活動 ステップアップ支援事業	市民文化活動 推 進 事 業	都市魅力創造事業	
申請件数	19件	30件	12件	6件	67件
採択件数	15件	17件	6件	3件	41件
採択金額	1,190,000円	7,056,000円	4,224,000円	5,512,000円	17,982,000円

令和6(2024)年度採択事業紹介

スタートアップ
支援

駅前の商業施設がアートで水族館に

事業者 ジョルノ営業者会

事業名 GIORNO ARTE2024

日程

令和6(2024)年8月3日(土)・4日(日)

会場

ジョルノ 2階・3階エスカレーター横ガラス面／1階ジョルノ前広場



概要

商業施設内のエスカレーター横のガラスにゆびえのぐを使ってこどもたちが絵を描く機会を提供。絵のテーマはかつて堺に水族館があったところから「水族館」。その後1か月はそのまま公開。1階外のスペースに小さなこども向けの足跡エリアも設定。

参加者：2日間合計175人（こどものみ）

執筆者
所感

暑い日が続く8月最初の土曜日に視察に伺いました。館内のガラス面に描くのは4歳以上、それより小さなこども向けは一階の外の通路と分けて実施されていました。その狙いとしては、ガラス面はある程度テーマ(水族館)に沿った絵を描いてもらいたいという意図があり、それが可能なこどもたちということでした。建物内は常時描いている人がいてあっという間にガラス面が埋まっていました。同じ建物内にある子育て支援センター「さかっこひろば」の利用者層はもう少し小さなこどもが多いので、1階外のスペースも用意され足でペタペタできる絵の具遊び空間になっていました。外のエリアも午前中は日陰で風も通り快適で、ちょうど良い洗い場スペースも用意されていて、親子が安心して絵の具体験をすることができていました。通りすがりの方もこどもの楽しそうな様子に優しい表情を浮かべていたり、「素敵ねえ」と声に出して行かれる方も複数ありました。参加されていた保護者からも「なかなかこの様な機会が無いので嬉しい」という声を多数聞きました。

たくさんの関係者がおられる商業施設の共用スペースでの実施は準備も大変だったと思いますが、スタッフで入られた商店会の皆さんも楽しくやりがいのある場になっていたのではないかと思います。多くの人が行き来する施設での人と人がアートで交わる素敵な事業でした。(青木PO)

スタートアップ
支援

浴衣で集い、書と音楽と夕暮れどきを楽しむ

事業者 浴衣島実行委員会

事業名 浴衣島～水とながれる書とあそび～

日程

令和6(2024)年9月7日(土)

会場

月蔵寺



概要

堺の歴史のあるお寺、月蔵寺のお庭の水盤を使ったインスタレーションを実施。日本の文化芸術である書と音楽とのコラボレーションも行う。

参加者：大人180人、こども50人

執筆者
所感

柳之町の住宅街に数軒のお寺が連なり、その1つに月蔵寺がありました。金色の三日月の夏の夜に、ライトアップされ揺れる柳、水、アーチ型に連なる風鈴と、劇場のような空間です。夕暮れ時に色とりどりの粋な浴衣姿が集う浴衣ファッションショー、生演奏と流れる水のなかで書がしたためられるアーティスティックな時間でした。主催者の間宮さんによると去年は参加無料だったのを、今年は参加費（前売り200円、当日300円）としたことで、参加人数は少なくなり、でも空間にみあった人数になったかな、という感想。確かに、ライブ演奏の時も全員座ることができ、これ以上多いと観客は立ち見となったことでしょう。また去年は食べ物が少ないという声にこたえ、今年は近隣のお店からの飲食ブースも増えました。楽しそうにかき氷を食べているこどもの姿も多くありました。

パフォーマーの書家の西村さんは「70歳をすぎてこんなことに挑戦できておもしろい!」と興奮気味。庭に半径5メートルほどの水盤に1か所から水が流れる装置があり、その水の上に置いた布に書くと、すぐに流れてゆく墨の様子をおもしろい体験だと語っていました。布は堺の織物を使用。演奏したバンドメンバーの1人は車椅子。境内には海外ルーツのこども、杖をついている高齢の人の姿もあり、多様な人たちが参加している催しでした。

残暑の暑い日でしたが、雨も降らず、堺のまちで浴衣島が浮かび上がりました。(上田PD)

令和6(2024)年度採択事業紹介

地域文化活動
ステップアップ

地元企業のアートによる地域貢献

事業者 サカイサイクル株式会社

事業名 子どもたちと「音楽を楽しむ」プロジェクト

日程

令和6(2024)年12月19日(木)

会場

三国丘みのりこども園



概要

堺市で自転車屋を営まれている企業による、クラシック音楽の生演奏を未就学児へ届ける地域貢献事業。堺市内の認定こども園・保育所で実施。

参加者：10回開催 合計1,848人

執筆者
所感

三国丘みのりこども園での〈子どもたちと「音楽を楽しむ」プロジェクト〉に伺いました。

こども園の通常の時間のなかでの実施で、こどもたちと保育士さんが参加。ヴァイオリンとピアノの編成で30分ほどのプログラムでした。エルガーの「愛の挨拶」からスタートしてジブリの曲、クリスマスソングに加えて、手遊び歌、「おもちゃのチャチャチャ」などこどもたちが参加できる時間もありました。こどもたちは初めて聴く生のヴァイオリンの音や演奏者の姿に関心を寄せたり、知っている曲と一緒に歌ったり、自然と体を揺らしたり、手拍子をしたりとリラックスして大いに楽しんでいました。小さなこどもは慣れない環境では緊張してしまうこともあり、どこかへ出かけていくのではなく、慣れている場所で音楽と出会えるとても良い機会になっていると思いました。

この事業はサカイサイクル株式会社の社員が担当者として園への声かけや調整を行って、園などからの要望を聞き取った上で、〈一般社団法人100万人のクラシックライブ〉からアーティストを派遣してもらっているそうです。担当者自身は普段は普通に自転車屋さんの仕事をしながら、この事業の業務もされているとのことでした。企業による文化芸術での地域貢献のひとつの好事例だと思いました。(青木PO)

地域文化活動
ステップアップ

堺市音楽団創立30周年を記念するに相応しい大規模なコンサート

事業者 堺市音楽団

事業名 創立30周年記念特別演奏会

日程

令和6(2024)年6月9日(日)

会場

国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)



概要

堺市音楽団による吹奏楽の演奏会。こどもたちが参加できる企画としてザ・ジュニアバンドを運営。

参加者：約1,300人

執筆者
所感

会場の扉をくぐると、開演を待ちわびる様々な世代の観客が押し寄せ、熱気に満ちていました。約1,500席の客席がほぼ満員であることから、この日のコンサートがいかに特別なものであるかが伝わります。コンサートは「音楽団のヒストリー」をコンセプトに練り上げられた三部構成。第一部は、現役楽団員による「現在」の堺市音楽団を象徴するステージ。引き締まったアンサンブルと、団員一人ひとりの高い技術が光る演奏は、30年の歴史の中で培われてきた確かな実力を感じました。第二部は、未来を担うジュニアバンドのフレッシュな演奏に、会場からは温かい拍手が送られ、続く様々な編成によるアンサンブル演奏では、アットホームな楽団の雰囲気伝わってきました。第三部は、この日のハイライトとも言えるOB・OGメンバーとの合同ステージ。総勢約90名がステージに並び姿は壮観の一言。世代を超えた音楽の絆をひしひしと感じました。演奏が始まると、その音の厚みとエネルギーに圧倒されました。特に、悠久の歴史と壮大な風景を想起させる「シルクロード」のテーマ曲、そして雄大なホルストの組曲『惑星』より「木星」の演奏は、まさに圧巻。それは、堺市音楽団が紡いできた30年という大きな時の流れ、その歴史の重みと輝かしい未来への希望を音で描き出していました。(宮地PO)

令和6(2024)年度採択事業紹介

地域文化活動
ステップアップ

大阪駅高架下での若者によるホームレス殺人事件を題材にした、人間の尊厳とは何かを考える演劇

事業者 一般社団法人劇団コーロ

事業名 劇団コーロ公演「眠っているウサギ」

日程 令和6(2024)年12月6日(金)

会場 フェニーチェ堺 小ホール



撮影：関口淳吉

概要 フェニーチェ堺小ホールで、高校生によるホームレス殺人事件を題材にした「眠っているウサギ」(作／くるみざわしん 演出／高橋正徳)を上演した(上演時間：1時間40分)。鑑賞者に題材についてより深く考えて欲しく、終演後には、くるみざわしん(作者)、生田武志(「野宿者ネットワーク」代表)、池田直樹(弁護士／「ビッグイシュー日本」顧問)によるアフタートークを約30分間開催した。
出演者：8人、スタッフ9人、参加者：115人

執筆者
所感

平成24(2012)年にJR大阪駅の高架下で4人の少年たちがホームレスの男性に対して起こした悲惨な事件がありました。その事件を考えるシンポジウムに参加した作家が次の襲撃がなくなるようにと書いた作品です。事件を起こした4人の少年たちにも貧困や虐待などの苦しさがあり、社会のなかで居場所がありませんでした。そうした社会構造の中ですべてを解決するのは難しく、この演劇作品にも正解が描かれているわけではありません。けれど対話をうみだそうとする人々の粘り強さが大事であることが示されていました。

上演後、ホームレス支援に携わりホームレスとこどもの出会いを生み出すよう教育現場へホームレスの人と出かける取り組む生田武志さん、ホームレスの人の社会的自立を応援する「ビッグイシュー」日本の支援を行う池田直樹弁護士、劇作家のくるみざわしんさんの3人によるアフタートークからも学ぶことがたくさんありました。

実際に起きた出来事が演劇として上演されることは貴重です。当日は北海道や兵庫からも鑑賞に来られていましたが、鑑賞者は、比較的に高齢の方が多かったです。若い人たちにも鑑賞してもらいたい舞台でした。演劇ならではの熱量が堺市で広がっていくことを願っています。(上田PD)

市民文化
活動推進

泉ヶ丘駅前周辺で行われた大規模な市民文化祭

事業者 ビッグ・アイ共働機構

事業名 GAOフェス2024

日程 令和6(2024)年11月16日(土)・17日(日)

会場 泉ヶ丘駅前エリア(堺市立ビッグバン交流広場、パンジョホール他)



概要 泉北ニュータウンの中核地区にあたる泉ヶ丘駅前エリアを舞台に、音楽からライフカルチャーまでを網羅した市民文化祭を実施する。
参加者：4,161人

執筆者
所感

当日(16日)は小雨が降る状況でしたが、多くの人で賑わっており大盛況。多数のステージパフォーマンスに加え、マルシェやワークショップなど、様々な催しが開かれています。ステージへの参加は全て無審査で行われるとのことで、バンド演奏だけでなく、ダンスや民族音楽など多種多様なパフォーマンスが展開されていました。パフォーマンスだけでなく様々な店舗の出店もあり、まさに開かれた市民文化祭といえるでしょう。参加している世代や属性も多様であり、皆とても楽しそうであったのがとても印象的でした。

本フェスティバルは泉北地区の“街の再生”に向けた取組の一環として位置付けられ、官民が一体となって取り組んでいることに強く意義を感じました。これだけの規模のフェスティバルを運営するのは非常に大変であることは想像に難くないが、基本無料のイベントであるにもかかわらず、出演者の調整、ボランティアスタッフの運営など非常にスムーズなマネジメントがなされていると感じました。5回目ということもあり地域にも馴染んできているようで、学生ボランティアの一人は「泉北大好き！ずっとこの街に住みたい」との発言もありました。まだまだ盛り上がっていきそうなGAOフェス。今後の展開が楽しみです。(宮地PO)

令和6(2024)年度採択事業紹介

市民文化
活動推進

和太鼓奏者が主催する和太鼓を中心としたコンサート

事業者 一般社団法人Next Links

事業名 OSAKA太鼓EXPO2024

日程 令和6(2024)年11月3日(日)

会場 ソフィア・堺 中文化会館ホール・プラネタリウム



概要

和太鼓などの和楽器を演奏する世界的なプロ奏者と若手が共演する交流公演。

参加者：第1幕 302人

第2幕 508人

プラネタリウムライブ 122人

執筆者 所感

ホールだけでなく、プラネタリウムやロビーなど、ソフィア・堺全体を使用した大規模な和太鼓&和楽器フェスティバルで、アマチュア団体による公演（第1幕）、プロフェッショナル奏者による公演（第2幕）、そして篠笛奏者によるプラネタリウム公演と、丸一日存分に楽しめるプログラムでした。

特に第2幕の公演は圧巻。演奏家のレベルが高いだけでなく、舞台構成、照明、演奏曲のプログラミングと、総合的な舞台芸術として非常に洗練されており見応えがあるものでした。公演の特徴として、一つの和太鼓チームだけではなく、メインに世界的和太鼓奏者である林英哲の弟子でもある「英哲風雲の会」を据え、その他、東京で活躍するプロ和太鼓奏者、そして今回のプログラムのためにオーディションで選ばれた11名が参加するという様々なメンバーによって舞台が創られています。研ぎ澄ませたメンバーで協働する新しい創造への挑戦を感じました。

曲目ごとに異なるメンバー編成で演奏する構成になっており、緊張感漲るソロ演奏、緻密に構成されたトリオ演奏、そして大人数による華やかなアンサンブル演奏がバランスよく配置されており、飽きさせないプログラム。曲間の舞台転換や照明も見事で、素晴らしい舞台演出であり、和太鼓や和楽器に初めて触れる観客も大いにエンターテインメントを楽しんだことでしょう。（宮地PO）

都市魅力
創造

地域密着バレエ団は幅広い年齢層にアプローチし、輝く舞台を創出する

事業者 有限会社 野間バレエ団

事業名 野間バレエ団第32回定期公演「Progressive Dance Part9」

日程 令和6(2024)年8月16日(金)

会場 フェニーチェ堺 大ホール



概要

フェニーチェ堺大ホールにて野間バレエ団第32回定期公演「Progressive Dance Part9」の公演を実施。本公演では、堺市の歴史的人物をテーマにしたバレエ作品を上演。

出演者：団員・生徒24人、ゲスト10人、賛助出演6人、参加者：528人

執筆者 所感

眩しい夏の陽射しが少しやわらいだ夕暮れ時、フェニーチェ堺に集まる観客たちも華やいだ雰囲気。小さい子どもも楽しそうにロビーを横切っています。公演は、野間バレエ団の3世代の振付家による創作6作品が3部に構成されています。第1部は交響曲を用いて、古典と現代を巧みに取り入れ、若手のダンサーが出演しました。キレのあるコンテンポラリーダンスもありメリハリのある構成。第2部は地域密着バレエ団としての作品「みだれ髪・・・晶子讃歌」は28年ぶりの再演。野間景さんが主役をつとめ、シンプルな衣装と傾斜した舞台装置が斬新です。与謝野晶子の生涯を演出するために今回はプロローグとエピローグが加わり、言葉を使わずに物語を感じさせる演出で見応えがありました。第3部は会場であるフェニーチェ堺の開館に思いを馳せた「ボレロ・フェニーチェ（不死鳥）」の再演。繰り返す旋律、エッジの効いた照明も相まって会場が高揚していきます。最後は名作ロミオとジュリエットのバルコニーのパ・ド・ドゥ。日本を代表するプリンシパルによって、終演へと向かっていきました。

堺市内の小学校にアウトリーチに取り組むさかいミーツアート事業にて、野間バレエ団が訪ねた小学校の児童、先生、保護者を本公演に招待されました。はじめてのバレエ公演を楽しんでいる様子が観客席からも伝わりました。全体としてクオリティも高く、新しいバレエに挑戦している名公演だと感じました。堺市で毎年公演をつづけ、幅広い層へのアプローチを今後も期待しています。（上田PD）

文化芸術活動や補助金・助成金等に関するお困りごとについて、対面、電話、メールなどで相談・対話の機会を設けました。

<内訳>

○一般相談・堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談の別（件）

一	般	14	
補	助	金	48
合		計	62

○活動分野別（件）

音	楽	19
美	術	11
演	劇	4
舞	踏	1
伝 統 芸 能		1
メディア芸術		1
華 道		2
芸 能		1
文 学		3
そ の 他		19
合 計		62

相談事例

ご相談

商業施設のガラス面にこどもたちが絵を描く事業についてのご相談。
①当日のエリアの設定や気をつけることは？ ②当日のスタッフの確保や関係者である高齢の方にも一緒に活動してもらうためには？

ご相談

子育て中なので、小さいこどもをもつ親子のためのクラリネット4人のアンサンブルのコンサートを企画したい。助成金申請ははじめて。

ACからのアドバイス

4歳の息子さんを連れての来所。もう一人はオンラインで参加。おふたりは留学先で知り合い、現在も交流をつづけていて、すでに一度自主公演でコンサートを企画している。補助金申請を希望され、個人が任意団体で申請するか迷っていた。想定されるメリット・デメリットを伝え、よく話し合うことをおすすめした。コンサートは鑑賞型だけでなく、こどもの楽器体験やふれあいコーナー、あるいは子育て中の演奏者の情報共有会などの組み合わせもよいかも、また子育てしながら音楽活動をしている団体の事例をいくつかお伝えした。その後、令和7(2025)年度のスタートアップで採択された。

ご相談

関西大学で「出所者アート展」のあと、障害者の出所者支援を行うNPO法人から、出所者のアート活動に関する相談。当事者と出所者支援者ともに今回の発表を機会にさまざまな変化があったことから、アート作品を創作したい。

ACからのアドバイス

一ヶ月ほど先に展示の機会があるとのことだった。資金調達はできていないためアーティストを招くことはできそうになく、本人の作った作品に対する額装ワークショップを提案。関心のあるグループにも声をかけ、ダンボールやベニヤなど、ある物をつかって額装を行い、発表にのぞんだ。

堺市社会福祉協議会

堺アーツカウンシル

—高齢化した団地で、地域の新しい担い手に出会うために—

初夏に堺市社会福祉協議会(以下、社協)の喜田さんから相談を受け、いっしょに中協POと福泉東地区を訪ねることにしました。その時は地域の民生委員、老人会、福祉委員の女性たち5人から、担い手の高齢化、後継者不足の悩みが語られました。もう活動を止めようか、と悩む気持ちもあったそうですが、「こどもたちの笑顔を大事にしたい」と語られ、それならばできることはなにか、を聞いていきました。今の時代にあった地域活動の形や仕掛け、仕組みを模索していくことになります。

夏には上記の女性たちが中心に行っている月に一度の朝食こども食堂に伺うことにしました。小学校の半数の児童50人が参加し、小学校の先生、地域の福祉施設の職員、地域の歯医者さんが歯磨き指導をされ、地域と小学校の関係が築けていることがわかりました。そこで、こどもたちにアプローチし、小学校に協力をお願いすることを提案。こどもたちが行きたくなるような企画は何か、コロナ禍で途絶えた団地での「餅つき大会」を小学校で復活させるアイデアが浮上しました。高齢を理由に心配をされていましたが、社協が中心となって地域の関係者に声をかけ、本番前の打ち合わせ会議には20数名の関係者が集いました。



焚き火を囲む地域の住民と堺アーツカウンシルのメンバー



餅つきに挑戦するこどもと応援する大人たち

令和6(2024)年12月15日の「ふくひがFesta」にはさらに近隣の大学生、高校生ボランティア部なども加わり、協力団体も10以上に増えました。好天に恵まれ、約540人が参加。体力仕事は若者たちの出番です。餅つきの横で焚き火や校長先生による木工教室、地域の福祉関係者からの握力測定コーナー（思いのほか、こどもたちに大人気）、福祉施設による折り鶴コーナーなど賑やかに。メッセージツリーには大人やこどもから「楽しい」「またしてほしい」といった言葉が残りました。

こどもや親世代だけでなく、団地に長く住んでいる方、外国籍の方、グループホームに入居する高齢者の姿もあり、地域の多様な人たちが集いました。また参加するだけでなく、交流が生まれることを企図したこともあって、地元の若い世代からも「今後なにかやってみたい」と声があがり、手応えもありました。堺アーツカウンシルとしてはアーティストを起用したわけではありません。地域と地道に関係をつくってきた社協職員とともに、賑わいの結果だけを目標にせず、地域の多様な人々が混ざる工夫や過程を通して関係性を育んでいくことに注力しました。それは一人一人のありのままを認め、それぞれが何かにチャレンジする表現を尊ぶアートの態度だから実現できたと思います。(上田PD)



●堺市社会福祉協議会
喜田 慶次郎利益さんより

堺市各区の社協では、日常生活圏域コーディネーター(以下、Co)が配置されており、地域生活でのお困りごとへの支援や、誰もが孤立しない地域づくりをめざして地域活動への支援などを行っています。

堺市西区の福泉東校区は、住民組織の解散や休会が相次ぎ、後任の不在、活動者の固定化・高齢化が益々加速するという状況が地域課題となっていました。そんな状況を活動者よりCoに相談いただき、課題にアプローチする方向性として「多世代が顔見知りになれるきっかけを作る」ところから始めてみることにしました。

地域の多世代住民が集う「きっかけ」には自然と足が出向くような楽しさやおもしろさを感じてもらえるコンテンツが必要だと考え、堺アーツカウンシルさんに相談させていただき、「ふくひがFesta」イベントの構想が固まってきました。

堺アーツカウンシルさんに関わっていただいたことで、協議の場面では出席する皆さんからは前向きな意見が出たり、他地域での実践事例などイベントコンテンツの様々なアイデアを堺アーツカウンシルさんより提案いただいたことで、関係機関も含めてみんなでやってみようという気持ちにつながりました。「ふくひがFesta」は大成功で、そこから新たなつながりもできました。よりよい地域づくりの大きな一歩を踏み出せたように思います。

堺市内の公共施設・機関に所属する事業企画担当職員等を対象とした研修事業は、公益財団法人 堺市文化振興財団と堺アーツカウンシルによる協働事業です。各所属の研修参加者が地域の様々な主体（教育・医療・福祉・観光・国際交流・まちづくり）と連携したアートワークショップ等の事業を企画コーディネートするためのスキルを獲得することを目的とします。また公共施設の管理運営は民間会社等が指定管理者になり、多様化する地域性や社会的ニーズに応じています。しかし、指定管理者同士は競合関係でもあるため、経験や学びを共有できる機会はほとんどありません。そこで堺市の呼びかけにより、堺市でも重要視している「社会包摂」の考え方を身につけ、事業の企画立案にいかすために、立場を超えた超域的な研修事業を令和5(2023)年からスタートしました。1年間のうち、前半は座学・模擬実践を行います。教室や体験講座とワークショップの違いから始まり、社会包摂の落と

●研修のながれ

4月	オリエンテーション	ワークショップって何だろう・社会包摂って何だろう
5月	模擬ヒアリング	
6月	体験1・体験2	ワークショップを作ってみよう
8月	体験3	ワークショップを作ってみよう
8月～9月	ヒアリングの準備	
10月	実践1 作戦会議	ヒアリング、アーティスト選定
11月	実践2 作戦会議	アーティスト顔合わせ
12月～1月	ワークショップ準備	
2月	本番ワークショップ	
3月	総まとめ	1年間の学びをふりかえる

ふわふわとぽんとぽん

—こどもと保護者とみんなで身体をゆるめて、日常の場がゆるむ

日 時：令和7(2025)年2月8日(土)
11:00～12:00、14:00～15:00

アーティスト：佐久間新（ジャワ舞踊）、鈴木潤（音楽家）

対 象：未就学児、こども、保護者

会場・受け入れ先：さかいっこひろば

さかいっこひろばのヒアリングでは、父親がもっと楽しんでこどもに関わってほしい、という思いがあることから、その場にいる人も自然と身体を動かしたくなるようなジャワ舞踊の踊り手・佐久間新さんを起用。その場をささえる音楽のパートを即興に強い鈴木潤さんに依頼した。

大雪のため、アーティストが楽器類を持参できず、財団から運ぶことになり、研修参加者は早めに集合し搬入作業を行った。午前の会場は10畳ほどの区切られた部屋。研修参加者には空間が狭いことから気配を消したりいっしょに楽しんだり、影響をあたえる存在であることを意識してほしい、と事前にアーティストから伝えられた。午前はさかいっこ広場の施設長の挨拶からスタート。小さいこどもが他の大人にアクションを始めるなど、小さな動きにも集中した場になった。午後の会場は広いことから、挨拶はなく気がついたら始まっている演出に。2回ともに、まずは佐久間さんが親子にひとりずつ関わっていくことから始まる。その後、こどもたちの反応に佐久間さん、鈴木さんが即興で応答し、場の温度をあたためてゆく。自然と会場にいる人たちがリラック

スし、動きがたちあがっていく場になる。午後は出入り自由な場で大きな空間をダイナミックに使った。走り回るこどももいたり、雪の舞う窓ガラスをバックに踊る佐久間さんをみつめる瞬間があったり、遠くにいるこどもが鈴木さんの音楽に反応してリズムをとったり、佐久間さんと視線をあわせるなど、さまざま音や動き、視線が交差する時間となった。さかいっこ広場のスタッフ寺田さんが自然に楽しく身体を動かして、場に安心感を与えてくれた。研修参加者もまるで保護者のような眼差しでこどもたちに関わり、さりげなく動き、場の空気をつくることに寄与した。さかいっこ広場ではふだんはこどもの集中力が持たないということで30分程度のプログラムが多いのだが、1時間があっという間だったと、参加者やスタッフからの感想。

令和6(2024)年度は、文化施設職員、市役所職員、堺観光コンベンション協会、堺市立人権ふれあいセンターの職員12名が受講しました。前年度に参加した研修参加者は今年度、地域へのアウトリーチを担当するなど活躍しています。より実践的な研修となるよう今後も工夫を続けます。



スし、動きがたちあがっていく場になる。午後は出入り自由な場で大きな空間をダイナミックに使った。走り回るこどももいたり、雪の舞う窓ガラスをバックに踊る佐久間さんをみつめる瞬間があったり、遠くにいるこどもが鈴木さんの音楽に反応してリズムをとったり、佐久間さんと視線をあわせるなど、さまざま音や動き、視線が交差する時間となった。さかいっこ広場のスタッフ寺田さんが自然に楽しく身体を動かして、場に安心感を与えてくれた。研修参加者もまるで保護者のような眼差しでこどもたちに関わり、さりげなく動き、場の空気をつくることに寄与した。さかいっこ広場ではふだんはこどもの集中力が持たないということで30分程度のプログラムが多いのだが、1時間があっという間だったと、参加者やスタッフからの感想。

ふりかえりでは、配る予定だった楽器をこどもに配らなかったり、音楽で盛り上げるのは簡単だがあえてそうしなかったことなど、アーティストがその場にに応じた選択をしたことが話され、コーディネーターとアーティストの信頼関係を考える機会となった。

おにぎりにぎにぎ会

—場づくりとしての、料理と食。多様な人が出会うとは

日 時：令和7(2025)年2月18日(火) 10:00～15:00

アーティスト：中川圭永子（俳優）、中脇健児（ファシリテーター）、監修：小山田徹（芸術家）

対 象：視覚障害者とヘルパー

会 場：東文化会館

受け入れ先：視覚・聴覚障害者センター

研修参加者が視覚・聴覚障害者センターでヒアリングを行い、普段の暮らしのなかで家族から料理は危ないとして取り組めていない、という話を聞いて、集った人といっしょに料理をして食べる、という企画が生まれた。「焚き火」を囲み、人々が集う場をつくる美術家の小山田徹さんにも関わってもらうことでアートとしての取り組みを意識した。また中途の視覚障害者で俳優の中川圭永子さんは食事づくりのボランティアを数年続けていて、中脇健児さんも中川さんとともにその活動に取り組んでいたことから、このチームとなった。

当日は5名の視覚障害者とヘルパー2名が参加。最初に中川さんの「料理教室ではありません。みんなでつくって楽しみましょう」という声かけから始まった。数名は日頃から料理をしていて慣れた手つきで、研修参加者が料理を教わる場面も。全く料理をしたことがないという人も味付けなどに挑戦した。和気あいのうちに、おにぎりや豚汁が仕上がった。それでも、配膳の際に



は視覚障害の方は席につき、待つ姿勢になるのは、空気を読んだことであると察知した中脇さんが、リレーのように豚汁のお椀をまわすことを提案。急にその場に役割が生まれ空気が動き出した。また、おにぎりはいろんな具が入っているけれど、すべてぐると海苔が巻かれ、何があたるかわからない、見えないという仕掛けに。

食卓を囲んでいると、視覚障害の方が好きなアーティストの話やフェニーチェ堺のコンサートに行っているという話などもでてきた。研修参加者は自分たちが働く文化施設に視覚障害者の方が来てくれていることにハッと気づいた瞬間もあった。

ふりかえりでは、中川さんから、今日の参加者はコミュニケーションのたくみな人たち、家から出てこられない視覚障害者のもっといえる、と話された。でもそれは健常の人たちでも同じである。社会包摂を考える上で、さまざまな気づきをもたらす研修であった。

ふしぎな だんじり 紙芝居

—だんじり型紙芝居枠と7枚の絵、ダンスに音楽、即興物語のカオス空間に

日 時：令和7(2025)年2月23日(日) 10:00～14:00

お昼ご飯は、ふらっと提供のカレーライスとサラダ
24日(月・祝) 13:00～15:00

アーティスト：井上信太（美術家）、上田假奈代（詩人）

対 象：どなたでも。未就学児も歓迎

会場・受け入れ先：東深井つどいば食堂ふらっと

東深井で誰でも「ふらっ」とこられる、誰もが「ふらっと」な関係でいられる場所づくりを行うふらっとではこのところ、習い事や塾などでこどもたちが忙しくなり、立ち寄りづらくなっていることが話された。そこで、世界中のこどもたちとワークショップを重ねている堺市出身の美術家と詩人を投入することに。堺のこどもはだんじりに興味を持つだろうということで、井上信太さんからだんじり紙芝居が提案され、チラシ作成まで手がけることになり、食堂を通じて小学校へ配布された。研修参加者はGoogleフォームでの参加申し込みを作成するなど準備を急入りに行った。

また高校生のボランティア部や美術部への声かけを食堂に依頼し、当日は乳幼児や高校生も参加し多世代が交流した。井上さんは民族楽器や照明スタンド、画材などを準備。こどもたちは民族楽器に興味を示し、触れたり、段ボールいっぱいの色とりどりのマスキングテープを天井から吊り始め、それに誘われるように高



校生や大人もいっしょに空間作りに参加した。初日の昼食後には紙芝居劇のリハーサル。身体やその場にあるものを使って美術家と詩人が物語をつむぐ。会場を真っ暗にして、円になって回り出したり、換気扇に光がさしこんでいるのを太陽に見立てるなど、誰にも先がわからない展開にドキドキが止まらない。初日には緊張の面持ちで現れたこどもが予定を変更して2日目も参加し、堂々と楽しんでいた様子も印象深い。食堂のスタッフたちも「私たちも、何か!」と、2日目にたこ焼きをつくり来場者に振る舞われた。

研修参加者も来場者と積極的なコミュニケーションを行い、ふしぎなパワーにあふれた二日間となった。ふりかえりでは、研修参加者から「美しいカオス」という言葉が出てきた。この研修では、コーディネーターひとりひとりが場をともにつくる存在であることが確認された。

堺市で文化芸術活動されている方、文化芸術活動に興味のある方等を対象に、各テーマについての知識を深め、情報交換する機会とすることを目的に、堺AC主催の勉強会「地域でのアート活動を学ぶ勉強会」を3回、現場で積み重ねてきたPOそれぞれの専門性をいかし講師をつとめました。

また、堺市文化振興財団と協働し、数値化するには難しい文化芸術活動の「評価」について深掘りするトーク企画を1回開催しました。遠方からの参加もあり関心も高く、録画編集し堺市文化振興財団のYouTubeでアーカイブしています。

●第1回

テーマ 音楽から広げる世界
日程 令和6(2024)年6月12日(水) 18:00～20:00
会場 フェニーチェ堺 文化交流室AB
講師 宮地PO
参加者 6人

内容

音楽のアプローチは思いのほか広く、劇場で行えることもたくさんあります。長年劇場で音楽事業を実践してきた宮地PO。公共文化施設にあまり足を運ばないのは小学生高学年・中学生だと気づき、彼らが興味を持つような企画、広報を考えました。音楽家をモチーフに謎解き仕立てにし、こどもたちの目をひくデザインのチラシを学校で全員に配布してもらえよう教育委員会と連携します。そしてこの企画を他の施設でも行えるようにパッケージ化し、各地で展開されています。



●第2回

テーマ 未就学児とアートの活動を掘り下げる
日程 令和6(2024)年8月23日(金) 13:30～15:30
会場 フェニーチェ堺 多目的室
講師 青木PO
参加者 14人

内容

未就学児のアート活動は保護者との関わりなどにも及びます。自由な表現や対話がもたらすこどもをめぐる環境づくりそのものがクリエイティブです。長年アートマネジメントを手がけ、とくに乳幼児とアートな場づくりを行う青木POの経験を聞きたい、と各地から参加がありました。こどもが対象でありながら、実は大人へのアプローチが大事であること、仲間やスタッフも尊重され、関係作りがとても重要であることを学ぶ機会となりました。



●第3回

テーマ 話し合い・会議の折り合いを導くファシリテーション術
日程 令和7(2025)年1月27日(月) 15:00～17:00
会場 フェニーチェ堺 文化交流室AB
講師 中脇PO
参加者 12人

内容

活動の規模を大きくしたり継続していこうとすると、一人で担うことが難しくなります。関わる人、お手伝いの方も増えて、チーム化・組織化は避けられません。そうしたなかで話し合いや会議は必要で、話しやすい場作りや納得のいく着地点をみつけるための進行の術(ファシリテーション)を磨くことが大事になります。さまざまな場を進行してきた中脇POは、基本的なことから始めました。まずテーブルや椅子の位置レイアウト。話し合う姿勢に違いがみられることを実際に体感し、対立構造になる前の対話法など実践的な取り組みを行いました。

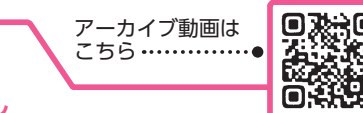


●堺市文化振興財団 × 堺アーツカウンシル トーク企画「文化芸術と評価のくねくね道」

日程 令和6(2024)年10月26日(土) 14:00～16:30
会場 堺市立東文化会館
登壇者 中村美亜(九州大学大学院芸術工学研究院教授、アートマネジメント)、大澤寅雄(文化コモンズ研究所、堺アーツカウンシルPO)、常盤成紀(堺市文化振興財団事業係長)
参加者 26人

内容

「文化芸術と評価」について、この分野の研究者である中村美亜さん、検証調査の実践者である大澤寅雄さん、評価を活用して文化芸術事業を企画運営している常盤成紀さんの3人にお話しいただきました。評価とは、査定ではなく価値をつけること。評価を伝えるとは、文化人類学のようなもので、言語の違う地域に文化人類学者が訪れる地域の言葉を覚え、調査滞在し帰国してから、その地域のことを今度は帰国した地域の言語で伝えるようなもの、と考えればいい、という中村さんが話されました。大澤さんは各地の文化芸術の事業を「生態系」と捉えています。循環することで土壌がよくなることから評価をそのように捉えたいと思いました。また、こども食堂にアートのアウトリーチを行う常盤さんは各地域の状況をリサーチしたうえで事業を組み立てます。こうした丁寧な取り組みによって、評価の方法論を編み出し、新しい価値を生み出しています。



アーカイブ動画はこちら.....



広報

●公式ホームページ(堺市ホームページ内)

堺ACが実施するイベントや活動報告についてのお知らせを随時更新しています。



●文化芸術活動に関する相談・対話



●公式SNS

堺ACの活動紹介、補助金採択事業の開催情報、文化芸術イベントの情報等を発信しています。



●ニュースレター

●チラシ



交流会 さかいとあーと井戸端かいぎ 〜ゆるく話そう。地域とアート、つながりづくり〜

「さかいとあーと井戸端かいぎ」は、堺市内でさまざまな活動をされている方同士が出会い、つながる場として毎回それぞれテーマを設け開催しました。テーマごとにワークを用意して話やすくするよう工夫しました。参加者の活動だけでなく、その方自身を深く知る機会になっているようにも思います。グループワークを取り入れ、お互いに聞き合うことによって、自分ひとりだけが悩んでいるわけではないと感じられたり、情報交換や交流が生まれました。3月にははじめて「採択事業者のミニ報告会」を行いました。発表前は進行役に「話せないから、聞いてくださいね」

とおっしゃっていた発表者が、経験をもとに語る言葉はひとりでも寂みなく、来場者も集中して耳を傾け、熱気に包まれました。福祉の仕事をされている方や環境問題に関心のある方なども参加され、アートの可能性を感じる対話もありました。終了後は参加者同士で連絡先を交換して、新たな交流が生まれていることを実感しました。補助金申請に向けて個別相談会を利用される方も増えてきています。そして、採択・不採択にかかわらず、その後も相談という枠組みで、採択事業に伴走したり、現場をお訪ねしています。

●第1回

テーマ 教えて！あなたの「堺とアート」
日程 令和6(2024)年5月27日(月) 14:45～16:30
会場 フェニーチェ堺 多目的室
参加者 21人



●第2回

テーマ 活動の喜びや苦勞、発見を話してみよう
日程 令和6(2024)年7月17日(水) 14:00～15:30
会場 フェニーチェ堺 文化交流室A
参加者 6人



●第3回

テーマ ゆる相談会、申請の手前で話してみよう
日程 令和6(2024)年11月20日(水) 15:15～16:45
会場 フェニーチェ堺 文化交流室AB
参加者 9人



●第4回+補助金事業のミニ報告会

テーマ 補助金事業をやってみて見えたこと、気づいたことを話しあってみよう
日程 令和7(2025)年3月6日(木) 13:00～16:00
会場 フェニーチェ堺 文化交流室AB
参加者 11人
発表者 6組



座談会—令和6(2024)年度の活動を振り返って—

令和6(2024)年度の堺アーツカウンシルの活動について語りました。

座談会メンバー

プログラム・ディレクター (PD) 上田 假奈代
プログラム・オフィサー (PO) 青木 敦子
大澤 寅雄
中脇 健児
宮地 泰史

上田PD: 令和6(2024)年度の堺アーツカウンシル振り返りの座談会です。今年初めてメンバーに加わった青木POはどんな風にお感じになりましたか。



撮影：成田舞

青木PO: 堺アーツカウンシルは敷居が低いのがいいなと思いました。相談窓口に来られてた方がいろんなアーツカウンシルのホームページを覗かれていたそうなんです、堺が一番相談しやすく感じたそう。これまで取り組んできたことがそう見せてるのかなと。実際、交流会・勉強会に参加される方を見ても「うっかり来ちゃった」みたいな人が混じる感じが面白いなと思ってます。それに、堺の人たちやっぱり面白い人が多いですね。

上田PD: 堺アーツカウンシルは堺の文化芸術推進計画にもとづいていて、共生社会を推進していくうえで作られたアーツカウンシルですから、敷居が低いアーツカウンシルと言ってもらえるなんて光栄です。全国一うっかり来てもらえるアーツカウンシルです。宮地POは一年目、いかがでしたか。

宮地PO: アーツカウンシルははじめてで、実はまだ要領を得てないという感じで、とにかく来た球をうちかえすような一年でした。その中で、補助金の視察でインタビューさせてもらったのが非常に新鮮でした。活動されてる方のネットワークづくりやアーカイブをアーツカウンシルとしてできたら面白いなと思いました。公演の内容も非常にレベルの高いものが多くてびっくりしました。けれど、観客はその

ジャンルの方ばかりなんですよ。関係者の中で回ってる様子に見えましたから、もっと多様な人たちに広がりが生まれれば、と思いました。またアーツカウンシルの役割って本当にたくさんあると思うんだけど、新しい人が何か始めようとするとき伴走支援も非常に重要と思いつつ、一方で、ハイアートな活動をどのように発信したり、並走できるのか、考えたいと思いました。視察のなかで、アーティストがプロフェッショナルとしてやっていく道筋が堺でどういうふうなものがあるだろうかと相談があったんです。企業スポンサーをさがしたり、インバウンド向けのショーケースなど、いろいろと手段があると思うんです。とにかく、堺アーツカウンシルは幅広く取り組んでいますね。

上田PD: 宮地さんは公立と民間の文化施設で働いている経験から、アーツカウンシルとして出会う人たちとの関わりに差異はありましたか。

宮地PO: 今は民間で、アーティストとしていかに向き合い、質の高いものを作るかという仕事を主にしています。そういう意味では基本アマチュアの方との接点はここ十年ほとんどなかったんですけど、その前の公立文化施設では、市民の方、アマチュアの方がほとんどでしたから、懐かしかったです。そして、こっちは大切だねっていうことを改めて思いました。

これまでは市民の方たちの活動をホールの側でしか見てなかったの、アーツカウンシルを通じている



んなところで活動されていることがわかってきたので、もっと調査をしていきたいですね。

中脇PO：アーティストが地域に根ざして活動することについてはどう思いますか？

宮地PO：そういうアーティストがいてもいいんじゃないかな。堺にアーティストが居続けてくれているといいと思います。ただそれを支援するっていうのはどういうことかはまだ具体的ではないですが。堺に表現できる場があるっていうことが大事でしょうね。そして、もっと横のつながりがあってもいいんじゃないかな。いろんな表現者が結構多くいるから、アーツカウンシルが橋渡しできたらいいと思います。インバウンド向けのショーケースや、企業とのマッチングなど。

ともかく、堺にアーティストはいますよね。でもその数は把握されていないと思います。調査と同時にネットワークができればいいですね。

大澤PO：「プロ」と「アマチュア」とのあいだ、中間層にはすごく幅がありますよね。その厚みに対して、何をめざすかっていうことじゃないかなと。

これまでは、文化施設が地域の文化振興を担うときに、自主事業では例えば東京からプロを呼んで鑑賞事業をして、地域のアマチュアを支援するために市民文化祭のような発表機会を提供して、というような事業のあり方でした。一方の貸館事業は施設を提供することで環境としては支援するけど、内容にはあまり関与しないっていうスタンスで市民の方やアマチュアと接してきたと思うんです。

青木PO：わたしは表現する人をプロアマに分ける必要がないと思うんですよね。やむにやまれず出てくるものがあって、その出力の高い人がアーティストな

のかなと。みんな持ってるんだけど、それをどういう方法で使うとか、どういうボリュームで出すとか、人によって違うだけかなって思っています。その出力が大きくなっていくなかで、評価にさらされたり、オーソライズされてそれぞれの領域に分かれていくんだと思うんです。それまでは雑多に混じり合っ



ていていいんじゃないかなと思っています。むしろそのあわいを精一杯豊かにするっていうことをアーツカウンシルはできたらいいんじゃないかな。

上田PD：宮地さんが言葉にしてくださったことで、プロへの道を考えているような人への関わりをアーツカウンシルとして踏み込んでいくことも考えていきましょう。

例えば、一昨年に社会福祉協議会（以下、社協）からの相談があり、その時は第三者として継続してその場にいることがよかったのですが、最終報告会に出席した別の区の社協から今年に入り相談を受けて、具体的にに関わることになりました。団地が並ぶ地域の担い手が高齢化していて若い人に入ってきてもらいたいということで、コロナで途絶えてた餅つき大会をしましょうと提案したんです。徐々に関わる人が増えて、想像以上にたくさんの方が関わり「ふくひがFesta」が開催されました。そういう場に堺のアーティストたちが呼ばれるようになるといいですね。そういうつなぎ方もできるといいですね。

また、関西大学人間健康学部所めぐみゼミから、キャンパス祭で「出所者アート展をしたい」という相談があり、わたしは刑務所とアートの活動に取り組んできたこともあり、企画に対して提案もさせていただきました。展覧会設営に堺在住のアーティストを紹介し、学生といっしょに「出所者アーティスト」と表現するPOWER OF ART展をつくっていただきました。これもマッチングの事例ですね。

中脇PO：宮地さんからのアーティストのショーケースとか、スポンサーとどうつながるかなど、アーツカウンシルのなかでそんな話は一度も出てなかったら新鮮です。

地域とアーティストのマッチングではないかもしれませんが、そういったコーディネートができる人材づくりとして企画担当者のためのワークショップ実践研修を、堺市文化振興財団さんと共催で実施しています。市内の文化施設の職員さんを対象に、社会包摂とは何か、アウトリーチとは、ワークショップとは、といった座学に加えて、実際にアーティストを呼んでプログラムを体験し



てもらうことをしています。最終的には実践編として、アーティストをこども食堂や、病院、福祉施設などへコーディネートして、ワークショップを実際に実施します。今年度は2回目で、研修対象者を文化施設だけでなく、堺観光コンベンション協会や区役所、人権ふれあいセンターの職員にも受講してもらいました。これらは地域の課題解決にいかにアートが貢献できるか、そういった企画をコーディネートできる役割を公共施設や公共団体の職員が担えればいいな、というところからはじまった研修ですが、地域で活動することがアーティストとして仕事になっていく、という観点から考えてみるとまた違う価値や展開ができそうですね。

上田PD：大澤POは調査の数字から見てきたことはありますか？

大澤PO：変化がありますね。今年度の特徴の一つが相談に他分野との連携事業が今までになく増えています。先ほど上田PDから紹介の



©Nonoko Kameyama

あった社協からの相談から生まれた餅つき大会や関西大学の福祉のゼミの出所者アート展の相談もそうですけれども、障がい福祉や子育て支援などと繋がる企画の相談、家族に障がいのあるお子さんをお持ちだという方からの相談もありました。どうすれば共生社会を実現するために文化芸術を活用できるのか、市民からも自発性が生まれていると思います。

4年間でずっと気になっていることは、堺区に相談と視察が集中していること。相談については他の区も少しずつ増えてきてはいます。視察が堺区に多いのはフェニーチェ堺があることも大きいと思うけれど、意識的にアーツカウンシルが堺区以外の文化状況をもリサーチしに行く必要があるんじゃないかなって思いました。

上田PD：なるほど。連携した事例も少なからずあるので、もっと紹介して発信していけばいいですね。それに今年は文化課職員が市内あちこちの民間の場所にも足を運んでくださっています。顔をおつなぎした後、次はプログラムディレクター・オフィサーがお訪ねする流れをつくりましょうと話しています。

中脇PO：アーツカウンシルがコーディネーターという役目と位置づくら、すぐ動きやすい立場だと思います。並走し、もし新しいチャレンジのタイミングなら補助金を勤めるなど、息の長い伴走ができる。青木POはこれからアーツカウンシルでやってみたいことはありますか？

青木PO：人々の表現活動が分かれるんじゃないくて、どこかでくっついていくといいなと思います。私はこどもとアートが関心ごとなので、例えば堺のこどもアトリエや居場所、塾などを訪ねてみたいですね。そこに横串を通すみたいなのが面白いかも、と思いますね。こどもの活動だとアートだけでなく、習い事や自然観察などジャンルが広くされていますよね。そういうところを訪ねて、関係をつくって、タイミングがあればアーティストも加わってみようかなことができれば。「場」があればアートが入っていく可能性があると思うんです。

中脇PO：そういう場が可視化できたらいいですよね。ところで、全国のアーツカウンシルはどんな流れになってきてるんでしょう。

上田PD：いま、アーツカウンシルは全国に18ほど。国や行政と芸術の関係はアームスレングスであることが原則だけど、日本版は自治体が設置しているものが多いので、行政との二人三脚だろうということですね。それから、これまで文化政策の担い手は財団とか公立文化施設で、そこに新しくアーツカウンシルが加わったわけですが、そうした既存の活動や場と連携したりネットワークを持つことが大事だと思っています。堺アーツカウンシルは財団と協働し文化施設職員への研修を行うことにも取り組んでいますから、先進的だと思います。

大澤PO：堺アーツカウンシルの厚みが出てきたなっていう気はしますよ。これまでの経験とネットワークの蓄積。有機的な連携が縦横斜めでつながれるように、土壌として整いはじめたと思います。あとは有機的に組み合わせて戦略的に展開していけば、第2期の堺文化芸術推進計画の重点的施策の一つである「文化芸術を通じた社会的課題の解決」の成果が確認できるのではないのでしょうか。